

## それは「少年十字軍」だった

橋爪大三郎

世の中にしばしば、「全共闘以後××年」といった回顧趣味の催しがあり、「あの人は今」といった追いかける番組もある。そのたびに鼻白む思いをするのは、かつて全共闘をやっていた団塊の世代のわれわれも、もっと若い世代の人びとも同じだろう。

今回の企画にも、そういう要素がまったくなかったとは言えない。だから「全共闘とは何だったのか」を考えるシンポジウムなどに、このこパネラーとして出かけたりにしないで、家で自分の仕事をしているほうがよかったのかもしれない。

けれど、そういう思いとまた別に、こういう声も耳に響いてくるのだ。曰く、全共闘世代は騒ぐだけ騒いで、あとは知らん顔、ちゃっかり大企業の中堅管理職に収まって、無責任じゃないか。また曰く、全共闘って何なのか、下の世代のボくらにさっぱり解らないのは、上の世代のあんたらがきちんと説明しないからだ。——こういう言い分が100%もつともだとは思わないが、私も彼らの世

代だったら似たような不満を持つだろうと思えて、いちがいに無視できない。

そこでこう考えた。今回たまたま縁があつて、全共闘のことについて話すチャンスが私に与えられた。これに背を向けず、言えるだけのことは言って、自分の持場を果たすことにしよう。全共闘のことが、自分のなかでそんなに大きなウェイトを占めているとは思えないが、これをきちんと正面から語れないようでは、ほかの仕事もいい加減だと思われてしまう、と。それで出かけたのである。

\*

シンポジウムのなかでも話題になったが、全共闘はもともと、誰かが誰かを代表するという原則をまったく持たない組織だった（それを「組織」と呼ぶとして）。だから、全共闘とは要するにこうだったと、したり顔に結論する権利のある者はいない。そこでは誰もが一兵卒。シンポジウムのパネラーたちも、そのなれの果て（たかが証人のひとり）にすぎない。私もあくまで、私ひとりの責任でのべるとしよう。

全共闘というものを考える場合、それがどんな要求項目を掲げたかというように、その組織原則にさかのぼることのほうが本質的である。

組織はふつう、誰かが誰かを代表するという関係（権限と責任の委譲関係）ができていて、さもなくば、組織は組織として機能できない。けれども全共闘の場合、あえてそういう関係を排除して、「その場に集まった者が組織の全体であり、その者たちが自分たちのことについて意思決定を行



なう」という直接性を重視した。それまでの左翼運動の経験から学んで、過去の党派の犯した誤ちを繰り返すまいと反省した結果である。

そういう事情は理解できるとしても、この発想は後向きである。「後向き」とは、全共闘がたかだか抵抗のための組織（運動）にすぎず、何かを積極的に実現するための永続的な組織であることを最初から断念していた、という意味である。こういう性格の組織が当時の若者を引きつけたという事実は、無視できないと思う。

全共闘の人びとは、自分たちの組織をめぐるこうした感受性を「反スターリニズム」と呼び、そういうものと納得していた。けれどもその内実は、政治や国家や公共的な領域から撤退しようという個人的な動機と大差がなかった。その見かけと違って、全共闘はちっとも「政治的」でなく、ささやかな個人的倫理感や実存のおびえの集積によってかろうじて成り立つ、あえて言えば「宗教的」な運動だったのである。

\*

宗教であるからには、救済の儀礼と、救済すべき懊悩とがそなわっているわけだ。

全共闘は、自分に対するマイナス・イメージ（自己否定）から出発するという特徴がある。市民社会の一員であるはずの自分を、公共世界のなかに位置づけるべきがない。これはやっぱり「病氣」だろう。ある時代、ある知的な雰囲気と呼び出した、知識青年だけがかかる病氣である。その病氣は治癒せずに、いまま尾を曳いている。最近、団塊の世代の人びとが多く集まったさる会合でこの趣

旨をのべたところ、「俺も病氣」「私も病氣」とみんな言い出し、その蔓延ぶりが印象に残った。

全共闘にはまた、独特の「正義」の感覚がある。それは、邪悪なものへの支配に立ち向かい、正しい社会に向けて歩み出そうという運動なのだ。しかし、正しい社会をどのように実現するかという方法論については、ほとんど考慮がない。私の友人は、こうした性急な未熟さを評して「少年十字軍」と言った。なるほど、少年十字軍そっくりではないか、と私も思わざるをえない。なぜ全共闘の正義は性急なのか。ひとつには、それが自己救済へのやむにやまれぬ衝動につき動かされて、まったく余裕がないから。もうひとつには、社会の具体像をありありと想いえがいてその将来像を練り上げるだけの経験も忍耐もないから。

全共闘はこのように、幼稚であり未熟であった。性急に健康になろうという程度には病氣でもあった。そういう運動に私が加わったのは、まぎれもない。過去から目をそむけることは無益だ。その出来事を、どのような事実関係や因果関係が支えていたのか解明しつくすことが、さしあたり自分の過去から自由になる唯一の道であろう。

\*

全共闘を未熟で病氣と言ったが、そんなことを言えば、戦後思想だって未熟で病氣だったし、戦前、戦中の超国家主義にせよ、幕末の攘夷思想にせよ、未熟で病氣でないものなどなかったのである。しかも、これらは互いに繋がりがあっていった。みんな横並びに免罪しよう、というのではない。全共闘の未熟さがどのような系譜の果てに生まれたのか、その繋がりを追いたいのである。



未熟であることの反対、つまり成熟とは何かを押さえておこう。それは生活のなかで、考え抜かれており、納得されており、実行されていることである。どういう思想も、こうして地に足のついたものとして生まれ、鍛えられ、われわれに知られるようになったはずだ。成熟した思想は、現実の一部である。人びとはそこで生き、そこで死に、悔いることがない。

何かの理由でこういう往復運動から切り離され、本来の場所とかけ離れた生活圏へ、単なる「知識」として伝えられた思想は、成熟の条件を欠き、どうしても未熟なものであらざるをえない。しかるにわが国は、聖徳太子の昔から、思想が未熟であることに慣れきって、それを不思議とと思ってこなかった。それどころか、知識の有無を権力に転態させて、生活のうえに君臨しようとさえしてきた。仏教も、儒教も、明治以降に流入した西欧思想も、そういう構図を抜け出すことは稀だった。マルクス主義も、この例にもれない。マルクス主義は、①外来の思想であり、②前衝党の神話を掲げて民衆（生活の場）に君臨しようとする点で、未熟な思想であるための条件を揃えてしまっていた。その末流に属する全共闘が未熟であったとしても、怪しむには足りないだろう。

ただしそれは、言うなれば「初期条件」にすぎない。若者は、現存する知識を噛み砕き吸収することで、思想を手っ取り早く手に入れようとする。だから全共闘が、未熟さをまともにかぶったとしても、それは仕方のないことだった。全共闘は潰滅した。そして、大学の外で毎日の生活を続ける人びとは、なんの痛痒も感じなかった。これこそ、もつとも全共闘を打ちのめしたはずのことである。であるなら、自分の未熟さ、自分を捉えた知識の「初期条件」といかに闘い、それをどこまで無化するかが、思想の課題となってもおかしくない。

で無化するかが、思想の課題となってもおかしくない。

\*

私のみるところ、団塊の世代（かつての全共闘（有）のわれわれは、自分たちを捉えた初期条件に立ち向かい、それを無化することに成功しているとは言えない。

初期条件を無化するとは、自分の出発点（過去）を忘れることではない。そうではなくて、自分をそう考えさせ、行動させたものの正体をつきとめることである。自分を支配したものの正体を知らない限り、それから自由になることなどできるはずがない。

たとえば、全共闘を含め、マルクス主義や戦後思想の常識では、権力は悪であり、国家は悪であった。それは、糾弾すべきものとして、自分の外側にあった。したがって、自分が権力を担う可能性は考慮の外にあったし、国家のあり方について自分が責任を負うことなど考えなくてもよかった。公共的な社会秩序に関してまったく消極的にしか発想できなかったのは、全共闘にとっても初期条件だったと言ってよいであろう。そして、そこから出発する限り、すぐ行き止まりや袋小路にぶつかるのは目に見えている。たとえば湾岸戦争のような事態が生じると、それをどう考えたらいいのか、まったく方針が立たない。

こういう初期条件は、どのように作られたか。法というものを「権力者の命令」としか解しない、アジア的（儒教的）伝統によるのかもしれない。法のように言語的に表明された原則ではなく当事者の合意を重視する、日本的慣行によるのかもしれない。とにかく、何らかの事情の歴史的堆積が、



われわれの初期条件にかたちづくったのだ。そうした条件こそが、われわれの限界を与えている。その拘束力を解除できる度合が大きければ大きいほど、それだけ思想は普遍的なものとなる。普遍的とは、時間・空間的な制約に縛られないといういみ。われわれがいま・ここに生存しているという時間・空間的な制約の具体的な中味（初期条件）を無化できればできるほど、われわれの生み出す思想は普遍的となり、われわれが人類のより大きな部分とつながる根拠になっていく。地球が平らだと信じていた人びとを笑うのはたやすいが、彼らがそれを克服するのがどんなに困難か、わが身に置きかえて思い知るのはむずかしい。

\*

民主主義というものに対して、全共闘は両義的な態度をとった。一方ではそれを前提にしながら（学生大会で可決されたストライキ決議に依拠する）、もう一方では手続き上の合法性にさして曳着しない（バリケード封鎖戦術）。民主主義よりも、当事者の合意により高い価値をおこうとする頓意識の伝統に根ざしているため、とも考えられよう。そのため、全共闘の行動パターンは、中世寺社の僧兵集団と驚くほど似通ったものとなった（黒田俊雄『寺社勢力』岩波新書を参照）。全共闘が、民主主義に対してすっきりとした関係がとれなかったのは、公的な権力について、まったく思想的な準備を欠いていたからだと考えてもよい。

たとえば、陪審員制度というものがある。刑事事件が起こって、ある市民（容疑者）の権利を制限しなければならぬ場合、近所の町から市民の代表が選ばれて、容疑者が有罪か無罪かを票決す

る。法律の専門家でも何でも普通市民たちが決定を下すのは、裁判を政治権力の手ゆだねないため。自分たちで裁判を担うか、さもなければ、政治権力（ないし法務官僚）が裁判権を握るか、どちらかなのだ。法、権力、正義——日常の市民生活に、それらはごくありふれたことなのである。公共的なルールをめいめいが守るからこそ、市民社会が成り立っている。その自覚は、欧米の市民社会ではごく基本的な常識に属する。

こういう常識から見れば、湾岸戦争を考える道筋は困難でも何でもない。そこではまず、国際法（正義）が規準となる。つぎに、その侵犯者（イラク）をどのような制裁（国連決議）に従わせるかが問題となる。そのあと、その制裁を、どういう手段で実現するか（軍事行動）が問題になる。こうした道筋は、市民社会の論理の素直な延長上にたどれることであって、とまどうべき論点はない。日本の場合、憲法の制約によって、できることとできないことがあるわけだが、それを留保することと、国際社会が全体としてどのように行動すればよいのかを判断することとは別のことだ。

\*

全共闘はもうひとつ、思想と政治とを混同した。と言うよりは、政治というものをまったく理解しなかった。政治を理解しなければ、妥協もあるはずがない。ゆえに、いたるところで機動隊に排除され、玉砕して終熄する。いかにも「少年十字軍」である。

思想と政治は、とりあえず、まったく別々の活動なのだ。

思想は、人間のあるべき根本的な前提から出発する。なるべく最小限の前提から出発して、どこ

まで豊富な結論を展開できるかが勝負である。その際、現実がどうであるかは、特に考慮しなくてよい。大切なのは、きちんと論理を追うことだ。

いっぽう政治は、あくまでも現実から出発する。あるがままの現実を認識し、人びとの生活がその現実のなかで営まれていることを承認する。そのうえで、それを無理なく一歩ずつ、あるべき方向に近づけていくルートを発見できるかどうか勝負である。その際、人びとのなかに究極の理想としていくかは、とりあえず考慮しなくてよい。大切なのは、それが合意可能、実行可能であること（現状からなめらかに移行可能であること）だ。

思想と政治は、このように異なった活動だが、単独で完結できるものでもない。

思想がつき詰めるのは論理的な可能性であり、一種の理想である。人びとがそれに同意したあとでも、それを現実のなかにどう活かすかという政治の課題が残る。思想は、現実から課題を受け取り、その成果を現実へと投げ返していく。思想は、現実と接点をもつ限り、政治と関わらざるをえない。

いっぽう政治も、現実には追従するのになしに、人びとを動員して現実を再組織しようとするれば、社会のあるべき方向を指し示す最小限の理想を必要とする。それを生み出すのが、思想にほかならない。思想なしでは、政治は政治であるための条件を満たすことすらできないのである。

こうして、思想と政治は不断の交渉を繰り返す。その複雑な絡まりあいのなかで、政治も思想も鍛えられるのである。政治のあるべき姿をめぐる、政治思想というものまであたりして、話はま

すますややこしい。けれども、これが社会というものなのだ。

全共闘は、思想と政治のこうした迂遠な往復運動に、興味を持たなかった。むしろそれを、墮落した悪の一種とみなした。政治と絶縁することで、思想の純粹さを守ろうとした。しかしそれでは、運動にならない。大した思想的準備もなく、とりあえず学生大衆の運動として出発したにすぎない全共闘は、そのためいちじるしく「倫理的」になってしまったのである。

\*

全共闘がどう未熟であったかを論じたければ、もっと先まで続けることができる。しかしここまですておこう。いまのわれわれも、十分に未熟である。未熟さは、自分のこととして語るべきだからだ。